

日露関係史料をめぐる国際研究集会パート2報告

二〇〇九年七月一日、サンクトペテルブルグ市からロシア国立海軍文書館セルゲイ・チュエルニヤフスキー新館長、同マリナ・マレヴィンスカヤ副館長をむかえ、日露関係史料をめぐる国際研究集会パート2を、史料編纂所と日本学士院(国際学士院連合関連)日本関係在外未刊行史料調査事業の一環)の共催により、東洋学研究所大会議室で開催した(通算九回目)。

研究集会では、ワジム・クリモフ教授(サンクトペテルブルグ国立大学・本所外国人研究員)から文久遣欧使節団に対するロシアの外交的準備について、次にマレヴィンスカヤ副館長から、日露戦後期の海軍駐在武官ヴァスケレススキー大佐と日本における活動についての報告があった。最後に演壇に立った海軍文書館セルニヤフスキー館長は、貴重史料一万八千ファイルの同館への「復帰」について報告した。核戦争勃発を危惧したソ連邦(当時)が、一九六九年、五つの連邦文書館から膨大な貴重史料をヤルトロフスク市(西シベリア)の史料保存庫へ運び込み、この史料群が四〇年ぶりにもとの文書館に復帰しつつあるという。ロシア国内でもその事実が全く知られていなかったため、報告への質疑は熱気を帯びたものになった。以下、この三報告を掲載する。

最後に、六月および七月の両研究集会とも、ワジム・クリモフ教授から多大なるご尽力をたまわったことを付記して謝辞にかえたい。

(プロジェクト代表/保谷 徹)

文久遣欧使節団に対するロシアの外交的準備について

ワジム・クリモフ

一八六一年一月二三日、ロシア皇帝臨席のもとで特別委員会が開催された。この会議に参加したのは、議事録末尾への署名に基づく、コンスタンチン大公、ゴルチャコフ公爵、プチャーチン伯爵、アレクサンデル・クニャージェーヴィチ、ドミトリー・ミリューチン、コヴァレフスキー陸軍中将。会議の議題は七項目あり、そのうちの四項目は日本に密接な関係があるので、そのなかには駐箱館ロシア領事に幕府が差し出した、サハリンに関する書翰への回答について(第二項目)、江戸・大坂開市と、兵庫・新潟の開港を七年間延期したいという希望について

(第三項目)といった問題が含まれていた。

日本から届いた書翰と報告によって、委員会は決議を行った。書翰と報告はつぎのようなものである。ロシア領事の報告、大君よりロシア皇帝宛の書翰、老中からロシア帝国外務大臣宛の書翰二通、リハチョフ海軍少将の報告抜粋である。

アレクサンドル二世宛の書翰は簡潔なものである。その書翰で、大君は「魯西亜国帝」に対し、日露修好通商条約の第三条および第六条によれば、江戸と大坂の二つの都市の開市、兵庫および西海岸の一港(新潟

が想定される)の開港の義務を負っている、と述べている。ただし、乗り越えたい障害が発生したので、大君は開市と開港を延期することを希望している。彼は、その交渉を行う責任を、二人の老中、久世大和守と安藤対馬守に委任した。書翰の末尾で大君は心からロシアの平和と安定を願っている。日付は文久元年三月一日、一八六一年四月二三日とされており、署名がなされている。書翰の写しは函館市中央図書館に所蔵されている<sup>(2)</sup>。

大君の命令によって、二人の老中は、ロシア帝国外務大臣に、長文の詳細な書翰を送っている。書翰の冒頭で、大君よりロシア皇帝に書翰が送られたことが記され、三百年間にわたって外国から日本が孤立してきたことが記されている。最近プチャーチンの使節が日本を訪れ、フランス、イギリス、オランダとならび、ロシアとも条約を締結した。興味深いのは、プチャーチンという名が、カタカナではなく「布恬廷」と漢字で記されていることである。

特別委員会では、遣欧使節団のヨーロッパ訪問についての諸問題が検討された。日本側は江戸・大坂の開市と兵庫・新潟の開港を七年間延期することを主張している。日本側は、新潟では排水量の大きい船が入ることができないので、他の適当な港を探しているという。委員会は、ロシアは日本に直接的な貿易上の関心を有していないので、「締結した条約のすべての条件を執拗に要求するのは、必要ではない」、ただし、「もし他の強国が日本側の開港の延期を受け入れなかったならば、ロシアも他の強国の権利を享受するのは当然である<sup>(3)</sup>」。

サンクトペテルブルクに滞在する間、使節団はサハリンについて交渉を行う予定であり、日本側の態度は強硬である、ということも指摘されている。日本は、この問題を未決定にしておきたい強国の圧力を受けているのではないか、という推測もなされている。サハリン島はロシアにとつ

て非常に重要であった。委員会の決議は、日本がサハリン全島をロシアに譲るかわりに、ウルツプ島を日本に与え、以後も日本人がサハリンに滞在する権利を与えるというものであった。幕府の使節団がこれを拒絶した場合は、サハリン島の分割も止むを得ないが、北緯五〇度という国境線は受け入れられない、というものであった。ロシア側の態度は、クシユンナイの哨所、すなわち北緯四八度まで、最悪でも四九度まで、というものである。箱館駐在ロシア領事に対して、こちらからは交渉を開始しないように、もし日本側が分割について提起してきた場合は、使節団がサンクトペテルブルクに到着後に交渉を行うのが適当である、と回答せよ、もし使節団に権限がない場合は、沿海州総督カザケヴィツチ海軍少将と交渉するように回答せよ、という訓令を出すこと、その場合は同様な訓令をカザケヴィツチに出すことも決議された。もしサハリン南部で日本人が勝手に新しい居住地を作った場合、ロシア政府の指示に基づき、箱館駐在ロシア領事は、日本側にはそのような権利がないと抗議することとされた<sup>(4)</sup>。

この会議では、日本の財政制度、金融、両替のレート、日本の貨幣の特徴といった問題は議論されていない。おそらく日露間の貿易は小さなものだったので、興味をひかなかったのであろう。

将来的な使節団の訪問に備えるに際し、ロシア最初の駐日代表ゴシケヴィツチの報告はおおきな役割を果たした。当時、ゴシケヴィツチは日本に駐在する人材として最適な人物であった。最初彼は中国語を勉強し、日本周辺諸国の習慣を理解し、橘耕斎とともに最初の和露辞典を編纂し、それはロシア科学アカデミーに高く評価され、デイミドフ賞を受賞した。彼は自身でも日本語を学習し、訓令に従い、全領事館員に日本語を学習させた。箱館から送った一八五八年二月三日のアジア局宛書翰(一八五九年五月五日にアジア局で受領)では、全員が日本語を少しずつ学習

し、女性さえも日本語会話を繰り返し練習し、ときどき優れた表現で日本側の役人を驚かせている、と書かれている。<sup>(5)</sup>もちろん、日本に対する彼の評価と見方は、ふさわしい教育が不足しているロシア海軍の将校たちのそれとは違っていた。領事としてゴシケヴィッチは、ロシア政府が決定を行うための、日本に関するすべてのデータ、すべての情報を提供する責任を負っていた。<sup>(6)</sup>ロシア政府は領事に、以下のような状況に注意を促している。「一八五五年一月二六日の条約によれば、サハリン島は日本とロシアに共有されている。サハリン島はアムール河口の向いであり、石炭資源が豊富であり、私たちの極東の艦隊にとつてそれは重要である。したがってその全島は有用である。東シベリア総督は、サハリン全島について日本側と交渉する権限を持っているが、その際、日本とロシアの真の友好関係を傷つけないようにしなければならぬ。正義と健全な政策は、他の選択肢がないものである」。<sup>(7)</sup>

ロシア領事は箱館到着後、新しい生活、新しい住居の準備などのさまざまな問題に直面した。度量衡の単位、両替のレートなど、すべてはロシアと違っていた。したがってロシア人は生活習慣に慣れるのに時間がかかった。ゴシケヴィッチの書翰は言う。「どのように日本人は自分の家に住んでいるか。多くの家には屏風とほろほろの紙しかないが、外は零下五度である」。<sup>(8)</sup>特別委員会の会議の際には、日本の財政制度・貨幣の特徴の問題は議題にはなかったが、訓令にしたがってこの問題についてロシア領事は詳しい情報を報告している。最初の日から日本の貨幣の特徴に彼は直面した。彼はロシア・ルーブルと日本貨幣の交換レートを定めることを要求している。

一八五八年一月三日の書翰（アジア局で受領されたのは一八五九年三月五日）で、ゴシケヴィッチは、市場ではすべての商品の外国人に対する価格はメキシコ・ドルで表示され、金貨は受け取れないと述べて

いる。ロシア・ルーブルの公式的なレートを決めるため、箱館奉行と交渉したが、彼らは長い間回答せず、江戸からの公式的指令を待っていたようである。一八五八年の初頭から、金の値段は上昇しなかった。ゴシケヴィッチは長時間にわたり、ロシアの銀貨と金貨の品位の説明を行った。貴金属の場合は重量だけではなく品位が重要であることを指摘した。最終的にロシア・ルーブル銀貨一ルーブルは七五セントであると決定された。すなわち、一メキシコ・ドルは、一ルーブル三三・一／三カペイカである。このようにして一ルーブルは、日本の貨幣で税金六パーセントを除いて銭三六〇と定められた。もし六パーセントの税金を含む場合、一ルーブルは銭三八八〇である。ただし、ゴシケヴィッチによれば、地方当局は、銀貨の品位を決定することができず、ロシアの金貨と銀貨と補助貨幣は、レートを決めるため江戸に送られた。領事も自ら貨幣の品位を分析した。ゴシケヴィッチによると、ロシアの銅一ポンドは、一〇一匁であり、金貨一枚を、「日本ポンド」と名づけ、一六〇匁と報告している。一「日本ポンド」が、一ロシアポンド五〇ザロートニク（золотник）<sup>(9)</sup>であるとゴシケヴィッチは結論している。<sup>(10)</sup>ゴシケヴィッチはロシア人に慣れた単位を用いたのである。またロシア領事は、日本貨幣の特徴の一つが銀貨に対して金貨が安いことであることを指摘して、国際貿易では金貨が外国に流出するだろうと予想している。

一八五九年八月一三日の書翰で、ゴシケヴィッチは「昨日（八月二日、引用者）箱館奉行に公式的な書翰を送り、ロシア金貨のレートを定めることを希望した。条約によれば外国の金銀貨は日本国内で自由に流通することになっているが、江戸においてその条項に反対しているものがあるようだ。金貨が銀貨に対して安すぎるのである」と書いている。<sup>(11)</sup>そのため領事館は箱館奉行から金貨を借り入れなければならなかった。

一八六〇年二月一三日江戸から送った書翰によると、「すべては非常

に高価になり、日本人によると、食料品さえも昨年比し二倍の価格となっている<sup>(12)</sup>。

ゴシケヴィッチの一八六〇年二月一三日の書翰によれば、幕府は一メキシコ・ドルを、一分銀三枚とし、四パーセントをそこから減少させることとした。幕府の説明によれば、それは計算を容易にするため、すべてのメキシコ・ドルの重量が一定でないためであり、四パーセントはメキシコ・ドルを日本の銀貨にするための費用である。金貨についてはロシア領事は次のように述べている。「ここでは外国金貨が流通することはできたろう。ただし、外国人はドル以外には何も持ってこないからである。逆に金貨は最近大量に流出している。したがって、流出をとめるために、外国の金貨と均衡するよう、日本は金貨の価格を上昇させた。すなわち、一分銀四枚の小判は一分銀一三・五枚に改められた<sup>(13)</sup>」。

特にゴシケヴィッチは新潟開港を重視していた。特別委員会のメンバーは、詳しい情報を得ていた。幕府は条約に基づいて、本州の西海岸の新潟を開港する予定であった。そのため調査団が派遣された。ゴシケヴィッチはオランダ船バリ号 (Baris) からそのことを知った。この船の艦長は長崎から、新潟近くの海岸を調査した後、江戸に立ち寄り、一八五九年五月六日箱館に来て、ロシア領事に情報をもたらした。ゴシケヴィッチは、箱館奉行に説明を求めたが、奉行もバリ号艦長から情報を得ていると回答した。五月一〇日、ロシア領事はクリッパー艦ジギット号 (Жигитт) でナジモフ (Назимов) 海軍大尉を新潟と周辺の海岸を調査させるために出張させた。クリッパー艦「日本島」(本州、引用者)の西側に沿って、能登半島まで行き、一九日に帰還した。マイデル (Maider) 海軍少佐とナジモフ海軍大尉の報告によると、詳しい調査の結果、新潟の碇泊地の水深の測量だけでなく、そこから六マイル離れたアオシマ・ヤマト入江、富山湾を調査し、いずれも適切な碇泊地を

見つけることができなかった。新潟港は、北緯三七度五八分五〇秒、東経一三九度一〇分、浅瀬によって、大きな船が入ることができないので、入江で碇泊しなくてはならないが、南西から北をへて北東までの風に向かって開かれている。南と東のからは守られている。結論としては、新潟港を否定するには及ばない。「それは西海岸でもっともよい入江である。夏季にはすべての船が新潟港に入ってくる。新潟の町の人口は七万人ほどであり、運河が多く作られ、国内商業が盛んであると推測される。したがって、海外貿易のセンターとすることが容易である<sup>(14)</sup>」。

クリッパー艦が帰還後、ゴシケヴィッチはすぐに江戸に行く予定であった。アメリカ領事ハリスに先立って、新潟港の問題を交渉するためである。しかし、箱館には江戸から大目付が派遣されることが判明し、箱館における領事館の場所および金貨のレートを決める交渉を行うために、それを待った<sup>(15)</sup>。

一八五九年一月七日のアジア局宛書翰で、ゴシケヴィッチは、一月六日に、江戸でイギリスとフランスの総領事は、開港地として新潟を拒否したという知らせを受け取った。その理由は、海が浅すぎ、船が沖で碇をおろさなければならぬことであった、と述べている<sup>(16)</sup>。

一八六〇年一月五日の書翰で、ゴシケヴィッチは次のようにアジア局に報告した。幕府の一〇月二五日 (露曆一〇月三一日) 付公式通知によれば、来年一月に本州西海岸の新潟を開港する予定であったが、そこが適当ではないことが判明したので、新潟のかわりにより相応しい場所を探すつもりである。現在までそれを探すことはできておらず、この季節にはしばしば本州の西と北部ではしばしば嵐がおこるため、それを調査することができない。日本の西海岸で港を開くのがいつになるのかは決定できない。ロシア帝国外務省は、本年五月一三日に海軍省と大蔵省への公式文書で、日本側は一八五八年に締結した条約の第三条によれば、

西海岸の港をロシア船に開かなければならなかったが、新潟は不適當な港であることが判明したので、本州の西海岸の港の開港時期は不確定である、と述べている。<sup>(17)</sup>

ゴシケヴィッチは事前に日本側のヨーロッパとアメリカに使節団を派遣する予定があること、日本人の役人による世界一周使節が計画されていることを報告している。彼の報告によれば、その団長は外国奉行村垣淡路守になるといふ。ほかにはプチャーチン使節団ですでに知られていた森山多吉郎（銳之助）も派遣される予定であった。使節団の出発の日も、翌一八六〇年の春と報告されている。春にアメリカ船でサンフランシスコへ出発し、サンフランシスコからニューヨークへゆき、イギリス、フランス、ロシアを訪れて、アムール川を経て帰る計画であるといふ。<sup>(18)</sup>

一八六〇年一月二三日、ゴシケヴィッチは箱館から江戸へスクリュー輸送艦ヤポーネツ号（「SHOROU」）<sup>(19)</sup>に到着した。江戸湾で二月一日にアメリカ艦ポーハタンと遭遇した。後の説明によると遣米使節団がアメリカに出発したところであるといふ。ロシア人は一二〇人という使節団の人数に驚いた。アメリカ公使ハリスは、ゴシケヴィッチに、その使節団はアメリカのみを訪れ、アメリカから他の国は訪問せずに直接に日本に帰ると述べた。<sup>(19)</sup>このようにアメリカ人はヨーロッパ人に先んじた。

一八六一年三月一五日の江戸からの書翰で、ゴシケヴィッチは幕府がヨーロッパの条約を締結したすべての国に使節団を送る計画について報告している。村垣淡路守が述べたところによると、幕府はその目的のために適当な軍艦を探しているところである。ロシア領事は、フリゲート艦スヴェトラナ（「Светлана」）を、大砲をはずした上で貸与するといふ提案をした。しかし、日本側は軍艦を購入する希望を持っており、ゴシケヴィッチのアイディアは拒絶された。さらにゴシケヴィッチは、ヨー

ロッパへ、シベリア経由で使節団を送る提案をした。しかし、その計画を積極的にはすすめなかった。ゴシケヴィッチ自身の考えでも、八〇人の使節団を送るには、それは多くの困難と多額の費用を要するからである。おそらくその人数は遣米使節団の人数から推測されたものである。<sup>(20)</sup>ゴシケヴィッチの考えでは、使節団の指導者の一人となるのは鳥居越前守である。もし日本側が適当な船を購入することができれば、オーロコックがすすめたイギリス軍艦が利用される予定である。

指摘したいのは、ゴシケヴィッチの貢献によって、ロシア政府が使節訪問の二年前から、使節団の人数と目標、ルートなどの詳しい情報を受け取っていたことである。一八五九年の春の段階で、ロシア政府が有していた日本政府の実態、指導的な政治家についての情報はとても少なかった。したがって、詳しい訓令をロシア領事に与え、「江戸におもむき、日本に関して正しい情報を得る機会を持つこと、わたしたちにとってもっとも重要なのは、幕府の構造、人物、特に大君に関するすべての情報である」と命じたのである。ロシアでもヨーロッパでも日本に関しては非常に乏しい知識しかなかったのである。このような知識が直接的な関係を進める上でとても大事であった。<sup>(21)</sup>

まずロシア領事は、ヨーロッパ人に分かりにくい幕府の支配構造を調査しなければならなかった。ヨーロッパ人にとって、単独責任制は当然のことであったが、同時に数人がおなじ部局の担当者であることは理解し難いことであった。ヨーロッパでは外務大臣は一人である。そのことについてロシア領事は、一八五九年五月二六日のアジア局宛書翰において、箱館奉行は彼に、外務を担当するために、江戸に五人の大任が任命されていると述べている。水野筑後守、酒井隠岐守、堀織部正、村垣淡路守、加藤彦岐守である。貿易だけではなく外国に関係するすべての事項の担当者である。江戸に船でゆくか、その周辺に赴いた場合、

必要であればその人々に書翰であるいは口頭で通知しなければならない。<sup>(22)</sup>

ゴシケヴィッチは書翰で、奉行はロシアと違い日本では二人置かれていと述べている。一人は地方におり、もう一人は首都で地方の当局を代表するものである。それに関連して、領事は、インフラストラクチャーが整備されていること、郵便が速やかに着くことなどを報告している。奉行には首都に同役がおり、毎年交代する。地方にいる奉行は江戸にいる奉行に報告を送り、江戸にいる奉行が老中に提出する。同じく首都から指示が地方に送られる場合も、同役を通じて送られる。したがって、首都と国内の町の間で定期通信が毎月三回、非常に速やかにおこなわれている。しかし、領事の書翰は、意図的であるのか、とても時間がかかる。ウニコフスキー (Иван Семёнович Унковский) の書翰が到着するのには二ヶ月を要した。もしその期間が短縮されれば、ロシアにより頻繁に報告することができるようになる。長崎と上海の間では頻繁な通信が可能だからである。<sup>(23)</sup>

一八六一年三月二八日、江戸に滞在中、ゴシケヴィッチは幕府のトップレベルの指導者と日本の暦についてつぎのように報告している。今月二六日から年号が変わって「文久」と名づけられた。大君・家茂になってから三つ目の年号である。今年大君は成人となり、一八歳であり、ミカドの娘と結婚する。大君は外国人に友好的な態度を採っており、進歩派、将来の改革者であると思なされている。大君には幸福な将来が予言されており、改革は遠くない時期であると考えられている。領事の意見では、大君の権力はより強くなり、以前の「將軍」という称号を「大君」へと変更しているといふ。<sup>(24)</sup>

ヨーロッパ人にとって大君と天皇の関係はわかりにくいものであった。一八六二年七月六日の書翰で、ゴシケヴィッチは、オランダ人は日本には精神的皇帝と世俗の皇帝という二人の皇帝がいる、という誤解をもた

らした、と述べている。ゴシケヴィッチによればなぜそのような名称を採用したのかは説明しがたい。真実にもっと近いのは、軍人のリーダーと、文官のリーダーと名づけるのが正しい、なぜなら、軍人の位は軍人のリーダーが、文官の官位は文官のリーダーが与えるからである。実際は「將軍」(武將、権力の君主)は権力者であり、代理人であるが、皇帝ではない。將軍は近々、自分の手に王の権力を握るとおもわれる。ヨーロッパ強国の公使が誤解に基づきそれを促進している。二つの制度が統合され、將軍が最高権力を握るのではないか。現在、「大君」は唯一の支配者になるうとしている。もしそれに失敗すれば、「將軍」という地位に戻らなければならない。<sup>(25)</sup>

ゴルチャコフ公爵と他の外務省職員にとっても、幕府の職制の理解は困難であった。例をあげると、外務大臣ゴルチャコフ公爵は江戸宛の書簡の宛先を「日本最高会議」とした。その書簡はヤマトフが翻訳し、ゴシケヴィッチが点検した。ヤマトフはそれを「御老中」宛と翻訳した。ゴルチャコフ公爵は、「御老中」の任務をよく理解していなかったと思われる。一方、それを受け取った日本側は、ゴシケヴィッチの地位について、その名称を理解していなかったと思われる。書簡にはつぎのように記されている。「コレスキソヘートニツキイラシフコシケビッチ」。日本語の読めるロシア人が読んでもこれは理解できないし、ロシアの官僚制度について理解のない日本人にもこれは理解できない。これが一つの単語であるのか複数の単語であるのかも判然としない。実は、ロシアの位階「六等官ヨシフ・ゴシケヴィチ」(Коллежский советник Иосиф Гошкевич)をそのまま日本語に書き写したものである。双方が適切な理解を得るためには、双方で相当の努力を必要としたのである。両側の架け橋がゴシケヴィッチであった。彼の業績は大変なものである。ともかくも、他のヨーロッパの強国に比べると、日本人であり、外務省アジ

ア局の通訳であるヤマトフと、中国・極東の専門家であるゴシケヴィッチのおかげで、ロシアは有利であった。さらに、当時の最高の日本専門家であるシーボルトもまた、ロシアへの協力を熱心に望んでいた。

箱館にいるロシア帝国の領事は、ときどき江戸を訪問し、客観的な情報の収集のために大きな仕事をした。七月六日の報告で彼が指摘したのは、あつめた情報がすべて噂であるが、それらの噂は繰り返し語られており、事実に近いのではないかということである。箱館奉行も、すべての役人も、外国人が情報に接触しないように努力している、と述べられている。<sup>(26)</sup>この書簡でゴシケヴィッチは、安藤対馬守の襲撃について伝えている。安藤対馬守は自分自身で抗戦し、また襲撃者の一人は趣意書を持参していたという。彼らの説明によれば襲撃の理由は、第一に、前に暗殺された「御大老」と同様安藤も、外国人と親しくし、安藤は日本の詳しい地図を外国人に提供し、日本沿岸の水深測量を外国人に許し、憎むべきシーボルトとしばしば会って、国家の制度や外国交際についての助言を受けた(外国人と、骨と肉のような関係で一体になった)。第二に、大君と天皇の妹を結婚させようとした。このような縁戚関係を結ぶことによって、天皇から条約の勅許を勝ち取るうとした。そして大君を天皇と同じ地位につけようとした。第三に、彼のすべての行為は最終的に天皇を打倒し、大君を滅ぼそうとするものである。<sup>(27)</sup>

その書簡でゴシケヴィッチは、大名の大君に対する不満が高まっているとも伝えている。大名たちの言い分は、開国した際のアメリカ公使ハリスの説明によれば、貿易によって日本の物価は低落し、商品が豊かになり、綿の衣類は無料同然、絹の布地は極めて安価に提供されて、日本人の衣類は立派になり、北から南から東から西から、生活必需品がもたらされ、農民たちは農地を耕作せず、種もまかずに楽な生活が送れるはずであった。しかし実際に外国と条約を締結して現れた効果はその逆で

あった。無料になるはずの品物の値段は三倍になり、関税はすべて大君の手に入る。その関税は国家のための要塞を作り、大砲を製造するかわりに、外国の公使を饗応したり土産物を与えたり、大君の宮殿を造つたり、花嫁を京都から江戸に連れてくるための数千両の支出のために、使われている。もし本当に大君が言うように国が立派になるのであれば開国を支持したであろうが、実際には逆でそうではない、自分たちにとって我慢ができないほどの負担ばかりであって、利点は一つもない。しかし外国人たちは、このような実態になるとはまったく言わなかった。ともかくもハリスは愚か者、オールコックは無礼者で、ベルクールはおしやべりぼっちゃん、領事たちは放蕩人、外国商人たちは詐欺師その他である。そして大君の言動には矛盾があり、外国人を軽蔑し、非難することを教えながら、一方で外国人の強さを非常に立派な言葉で表現している。幕府の役人の一人の言葉によれば、ロシア以外の諸国は、笑うことが可能である。

噂によれば、天皇は、全国民の不满によって、大君の影響力を消去しようとしている。ある噂では天皇は江戸に裁判官を派遣して大君を裁判にかけようとしていると言い、別の噂では大君をミヤコに召喚しようとしているという。日本の政治情勢を報告した後、万が一に備えて箱館湾に軍艦一隻の碇泊を要望している。<sup>(28)</sup>

文久使節団がロシアを訪問するに先立ち、ゴシケヴィッチは、噂に基づくとはいえず、できる限り客観的な情報を提示しようと努力した。ただし、海軍の将校たちは、ロシア最初の領事の活動に対して、いつも友好的な報告をしたわけではなかった。彼らの考えでは、ゴシケヴィッチの活動はロシアの国益を守らないものであった。例を挙げると、ポポフ(Попов)海軍少将はコンスタンチン大公宛の一八六二年六月一日付の書簡で、ゴシケヴィッチは、ゴンチャロフの小説「オプロローフ」の

主人公<sup>(29)</sup>と同じであると述べている。ポポフは、日本のような遠い赴任地であっても、ゴシケヴィッチ以上の適任者を見つけることはできるはずだと述べている。ポポフの意見によると、軍艦の艦長が退役後にそのポストを与えることもできる。海軍軍人たちが外交を行なうことのメリットは外交官に劣らない、美味な食事をとり、美味なワインを飲むことができ、他人の職務に首を突っ込まないようにすることができ、祖国の利害をまもること、緊急な状況で責任から逃げないこと、祖国のひとびとを守ること、という素質において、海軍軍人は外交官よりすぐれている。彼の意見の最後で、わたしたちの任務は、他の国家的任務より、すぐれた教育を与えてくれる、と述べている。<sup>(30)</sup>

〔註〕

- (1) АВПРИ, СПб. Г.А. I-1, Фонд 161, опись 781, год 1861, дело 496. Л. 33.
- (2) 大日本古文书。幕末外国関係文書之五十一。東京大学蔵版。東京、二〇〇七年。頁四一〇〜四一一。
- (3) АВПРИ, СПб. Г.А. I-1, Фонд 161, опись 781, год 1861, дело 496. Л. 40-40об.
- (4) Там же. Л. 38об. 40.
- (5) АВПРИ, СПб. Г.А. IV-2, Фонд 161, 1856-1865, опись 119, дело 5. Л. 5.
- (6) АВПРИ, СПб. Г.А., Фонд 137, Отчеты по Азиатскому Департаменту за 1858 г. Опись 475. Л. 193.
- (7) Там же. Л. 195-195об.
- (8) АВПРИ, СПб. Г.А. IV-2, Фонд 161, 1856-1865, опись 191, дело 5. Л. 4 об. 5.
- (9) ポンドとゾロトニクは旧ロシアの重量の単位である。ロシア一ポンドは九六サラートニクであった。一七四七年に金メッキ青銅のサンプルが作られ、法律によって一八九九年により厳密に、メートル法に準拠して

定められた。一八九〇年ドミトリー・メンテレーエフによって、プラチナとイリジウム合金によるサンプルが作成された。おそらくザラートニクという名称はキエフ・ロシアに流通していた金貨の名称に由来する。一ザラートニクは四・二六五七五〇三八グラムであった。一九二〇年、レーニンがサインした「国際メートル法度量衡の導入令」によって、ロシアの発展の歴史の特徴の表現であった単位制度は廃棄された。

- (10) АВПРИ, СПб. Г.А. IV-2, Фонд 161, 1856-1865, опись 191, дело 5. Л. 1-2.
- (11) Там же. Л. 8 об. 9.
- (12) Там же. Л. 71.
- (13) Там же. Л. 73.
- (14) Там же. Л. 25-25 об.
- (15) Там же. Л. 27-27об.
- (16) Там же. Л. 57.
- (17) Там же. Л. 66-69.
- (18) Там же. Л. 59-59об.
- (19) Там же. Л. 72.
- (20) АВПРИ, СПб. Г.А. IV-2, опись 119, год 1859-1865, дело 5. Л. 97-97об.
- (21) Там же. Л. 10.
- (22) Там же. Л. 11.
- (23) Там же. Л. 13-13об.
- (24) Там же. Л. 95.
- (25) РГАВМФ, Фонд 410, опись 2, дело 2452. Л. 266об. -267.
- (26) Там же. Л. 266-266об.
- (27) Там же. Л. 267-268.
- (28) Там же. Л. 268об. -270об.
- (29) 地主貴族は、無気力で実際の能力のない人物。
- (30) Там же. Л. 222-222об.

(翻訳) ワジム・クリモフ